

\* 先日、北京に出張してきた。私にとって初めての北京である。成田から4時間弱のフライトで北京に到着した。時差が1時間なので、成田を出発して3時間後に北京に到着したと思えばよい。東京から大阪まで新幹線で移動するとそれほど変わりはない。北京の空港は新しく広く気持ちが良い。海外からの旅行者にとって国の玄関となる空港がこのようであると、旅のストレスも少しは軽減される。

\* 中国では、大学発の起業も盛んだそうだ。IPOで巨万の富を手にした若き実業家が多数いる。雑誌によると、清華大学の年間研究開発費は10億元(約160億円)だそうだ。国家からの予算が大きいことに加え、巨大な企業集団を持っているからだ。清華大学関連企業が40社以上あり、これらの企業群に清華大学の研究室が事業計画を持ち込み、事業化を行う仕組みが確立されている。中国では、一部では、日本よりもむしろ資本主義が発達している部分もある。

\* 中国では先日、四川大地震に見舞われたばかりであった。今回の出張期間中に、中国全土で三日間、震災の犠牲者の喪に服す期間があった。この期間中は、市内の娯楽やTVの娯楽番組がすべて中止となった。TVで放映されていたのは、四川大地震に関する報道番組だけであった。中国では今年になってから多くの災いに見舞われた。このような試練を乗り越えることが、歴代の中国の指導者には求められてきたそうだ。

\* 今回の出張はIEEE ComSocのICC 2008に参加するためであった。オープニングセッションでは当初、China TelecomやChina MobileのCEOによる基調講演が予定されていた。ところが、四川大地震の復興を現地で指揮するため、両CEOとも欠席となり、代理講演となった。代理講演の冒頭では、CEOが現地で指揮している様子がビデオを使って紹介された。多くの中国古典の書物に記されているように、リーダーはこのような災難にあっても、逃げ出すことなく立ち向かい、民衆の信頼を勝ち取らなければいけないのだろう。

\* ICC2008では論文発表以外にも、各種委員会の会合が開催される。専門分野ごとにTechnical Committee (TC)と呼ばれる委員会(本会でいうと研究専門委員会に相当する)の会合が開催される。どのTCもオープン参加であり、やる気があれば、だれでも参加資格がある。ワークショップやシンポジウム、あるいは論文誌の特集号の提案があればそれをしてよいし、ただ参加して意見を述べるだけでもよい。やる気のあるもの同士が集まって様々な企画が提案・検討される。

\* また地域ごとの活動をする委員会もある。Asia Pacific Board (APB)という集まりである。アジア太平洋地域に関係するComSocメンバーであれば、だれでも参加することができる。小委員会に分かれて、Young Researcher Awardなどの表彰、ニュースレターやホームページを使った情報発信、Distinguished Lecturerの派遣、国際会議の報告、会員サービスの充実、新会員の加入促進などの活動がなされており、それらの小委員会からのアクションプランが報告された。APB会合もオープン参加である。日本からも多くの方が参加されている。また、韓国、中国、台湾、インド、オーストラリアをはじめとしてアジア・太平洋地域のComSocメンバーが交流する場となっている。

\* ICCやGlobecomといったIEEE ComSocのフラッグシップの国際会議では、論文発表で研究者同士の交流を深め、論文誌の特集号やワークショップ・シンポジウムの企画・運営を通じて研究者同士の交流を深め、技術の枠を超えて同じ地域の学会員同士の交流を深め、大学の会員と企業の会員の交流を深めるといった、いろいろな交流の深め方がある。

\* 電子情報通信学会でも総合大会・ソサイエティ大会では大学の先生方や企業のエグゼクティブから大学や企業の若手研究者まで幅広い年代の人たちが参加する。また研究会では、専門分野にフォーカスした研究者が最新の研究成果を発表する。日本の情報通信分野に携わる研究者が活発に交流できる場として、総合大会・ソサイエティ大会や研究会を活用することができる。

(編集特別幹事 塩本公平)